

モーツァルト荘

三浦哲郎



新潮文庫

モーツァルト^{そう}荘

新潮文庫

み - 6 - 9



平成二年六月十五日印刷
平成二年六月二十五日発行

著者 三浦哲郎

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)二六六一五一
編集部(〇三)二六六一五四四〇
振替 東京四一八〇八番
価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・株式会社光邦 製本・憲専堂製本株式会社
© Tetsuo Miura 1987 Printed in Japan

ISBN4-10-113509-6 C0193

新 潮 文 庫

モーツァルト 莊

三 浦 哲 郎 著

目次

モーツァルト荘のロック	七
モーツァルト荘の子守唄	三
モーツァルト荘の休日	九
モーツァルト荘の裸婦	二三
モーツァルト荘の晚餐	一七
モーツァルト荘の聖夜	二〇九

解説 進藤純孝

モーツァルト荘

モーツァルト荘のロック

一

ぼんやり夜空を眺めていて、星の一つが、ついと流れるのを見かけると、いつもきまつて胸底に微かなあせりに似たものが走る。早く早くと、せっかちに自分を急き立てるもの。けれども、当然のことながら、流れる星は忽ちのうちに燃え尽きて、あとの夜空には、ほんの束の間、長い尾の残像がうつすら見えているだけだ。

あせりが消えた胸底には、子供っぽい失望がにじんでくる。それから、またしてもチャンスがしてしまったという淡い後悔。

——まだ幼かったころに、流れ星を見たら急いで願い事を唱えろと教えてくれたのは、誰だっただろう。信心深い祖母だったろうか。毎日一緒に遊んだ二人の兄の、どちらかだったろうか。それとも、父の死後、行商をしながら女手一つで三人兄弟を育ててくれた母だったろうか。

誰だったかはもう思い出せないが、そう教わって、自分で何度となく試みたことはいまでもはつきり憶えている。あ、星が流れる、と見たら、すぐさま大急ぎで願い事を唱える。も

し、その星が燃え尽きるまでに一と言も残さずに唱えられたら、願い事はやがてきつと叶えられる……。

少年時代を過ごした郷里は、大気の澄んだ山間やまあいのちいさな宿場町だから、晴れた晩は星空が大層美しかった。寝しなに、背戸から外へ出てみると、両側から黒い山なみの稜線りようせんに狭められた星空が、ちかちかと瞬くまたた砂金の川のように見える。あのころは願い事をたくさん持っていたから、いつも今夜こそはと胸を弾ませながら仰いだものだが、なかなか思うようにはいかなかった。

その気で待ち構えていると、星はいつこうに流れなくて、何気なく仰いだときに限って嘲あざけるように、すいと流れる。急いで願い事を唱えようと思っても、もう間に合わない。星もこちらの魂胆を見抜いて、意地悪をしているとしか思えなかった。それならばと、なんの企みたくらもないようなふりをしていて不意に仰ぐという手を使ったりしたが、星をうまく騙だませたためしはなかった。

たった一度だけ、ひとりで夜道を歩いていて、つい、胸の思いを溜息ためいきと一緒に口にしながら空を仰ぐと、同時に大きな流れ星が視野を斜めによぎって、びっくりしたことがあった。あれは高校二年の春先のこと、べつに星へ祈るともなく、

『やっぱり東京へ出たいなあ』
と呟つぶやいたのである。

ただの偶然としか思えなかったが、結局一年後に、どうにかその願いが叶ったのだから、あれはやはり郷里の星の恵みだったと思うべきかもしれない。

東京へ出てからは、流れ星なぞ見た記憶がない。昼間働いて大学の夜間部に通っていたころは、なにかと心細くて、教室の窓からそつと吐息を洩らすことがしばしばだったが、そこから眺められる東京の夜空はいつも白っぽく濁っていて、流れ星はおろか、瞬く星さえ数えるほどしか見えなかった。大学を出て、小人数の広告会社で働いていた十年間は、夜空に目を上げることすら忘れていたような気がする。

ところが、子供時分にさんざん味わった流れ星への恨めしい思いが、その後も長年消えずに残っていたとみえ、五年前にこの高原へきてペンション稼業をはじめてからというもの、流れ星を見かけるたびに胸底が微かに疼くようになった。いい齡をして、と我ながらおかしくなるが、べつに願い事をする気はなくても、ひとりでに疼くのだから仕方がない。

尚作は、星明りのヴェランダの籐椅子で、火の消えかけたパイプを口にしたまま、ぼんやりしていた。

毎年、夜気の冷たさが薄れる今時分になると、一日の仕事をあらかた済ませたあとは、いつもこの椅子にきて、ゆっくり好きなパイプをふかしながら、なにを考えるともしに気ままなひとときを過ごすことにしている。高原は、とつくに寝静まって、時折、前の暗闇をか

すめて過ぎる夜鳥の羽音のほかは、なんの物音もしない。高原鉄道の駅前あたりは、これから秋口にかけて、都会からやってくる若い女たちで異様なほどの賑わいを見せることになるが、ここは駅から大分離れているから、その喧噪に悩まされることもなく済んでいる。

こんな人里離れた牧草地の片隅でさえ、乏しい資金では手に入れるのがやっとで、開業当時は、なによりも足場の悪さが客に嫌われるのではないかと気掛かりだったものだが、その後の駅前通りの発展ぶりは予想をはるかに上回っていた。みるみる東京の盛り場とあまり変わらない街筋になった。おかげでこちらは、いまでは自然そのままの静寂を求めて訪れてくる人々に珍重されて、常連客も年々増えているのだから、世の中はなにが幸いするかわからない。

背後のロビーの方から、やっとお喋りを切り上げて部屋へ引き揚げる気になったらしい中年女性のグループの、はじけるような笑い声がきこえてきた。もう十時を過ぎたとみえて、耳を澄ますと、毎晩その時刻に子守唄のつもりで低く流すことにしているピアノ・ソナタがきこえている。学生時代からモーツァルトが好きで、ペンション稼業に踏み切ったときも躊躇なくその不滅の作曲家の名を借用することにきめたほどだから、朝晩館内に流す音楽は年中モーツァルトの曲ばかりである。

その子守唄を聴いていると、昼間の疲れが瞼に溜まって、パイプもあやうく齒の間から抜け落ちそうになったりするが、そこで居眠りするわけにはいかない。まだ仕事の一つ残って

いる。

「へモーツァルト荘」の建物は、ロビーを間にはさんで客室と私宅とに分れているが、私宅のはずれのヴェランダにいと、自生のレンゲツツジの小群落をそっくり取り込んだ中庭越しに共同浴室の小窓が見える。いまは妻の文枝が湯を使っているが、やがて窓が大きく開くと、それが合図で、尚作はやおら腰を上げて廊下伝いに浴室へ出向き、妻と入れ替わって仕舞湯を浴び、湯を落して浴槽と流し場のタイルを洗う。

それで、一日の仕事はようやく終りになる。あとは寝酒もそこそこに、子供部屋をちよつと覗いて息子の寝息を確かめてから、明日に備えてさっさと自分のベッドへもぐり込むだけだ。

そろそろ合図があつてもいいころだと思つて、気をつけていると、まだ小窓は閉まつたままなのに、スリッパの音が廊下を近づいてきた。たまに、客が間違つて私宅の方へ迷い込んでくることがあるから、またかと思つていると、ドアを半分ほど開けたままにしてある戸口の薄闇に、白いタオルで包んだ頭が浮かび上った。

「御主人、いらつしやいます？」

そういう声で、アルバイトの大森佳子だとすぐわかった。

佳子は、東京の女子大生だが、もともとは郷里の隣県で高校の教師をしている尚作の次兄の教え子の一人で、その縁で一年生るときから、最も忙しい夏場だけ手伝いにきてくれてい

る。いま国文科の三年生だが、どうやら都会の学生生活よりも高原のペンション暮らしの方が性に合っているらしく、毎年、あたりに夏の気配が漂い出すのを待ちかねたようにやってくる。三年目の今年などは、まだ六月も下旬に入っただけの、今日やってきた。

こちらとしては、早くきてくれればそれだけ助かるから構わないのだが、予定より十日も早いと、面食らってしまう。まだ心準備ができていなかったせいか、ここでぼんやりしているうちに佳子がきていることをすっかり忘れていた。

「ああ、ここにいるよ。」

尚作は身じろぎをして椅子を軋ませた。白い頭がそろそろと近づいてきた。

「奥さんはこれからお風呂なんです。」と佳子はいった。「さっきまで東京からきたグループがロビーでお喋りしてたでしょう。あのおばさんたちに捉まっちゃったんですよ。最初はこの高原のことをあれこれ訊いてたけど、いつの間にかお喋りに引き込んだ。みんな井戸端会議のベテランみたい。」

「まあ、仕方がないさ、たまには。」

と尚作はいった。

引き込まれる方も引き込まれる方で、妻は女同士のお喋りに飢えていたのかもわからない。「それで、後始末は自分でしますから、眠かったら先におやすみくださいって。」

「わかった。しばらくしたら覗いてみるよ。あんたももう、やすんだら。明日からは朝寝坊

ができないよ。」

「ええ。でも、どうせすぐには眠れませんから。最初の晩はいつもそうなの。」

「東京では夜ふかしばかりしてるだろうからな、青春とやらを楽しむのに忙しくて。」

「違いますよ、御主人^{オナナ}。これでも極く極く大人しく暮らしている方なんですから。早寝で、寝つきも悪くないんだけど、ここへきた最初の晩だけは別なのね。変に興奮して眠れないんです。あんまり静かすぎて、耳鳴りがするし……。」

佳子は、ヴェランダの前へ出て行って丸太の手すりから身を乗り出した。

「……それにしても凄^{すご}い星ですねえ。こうして見ると、こっちへのしかかってくるみたい。これが東京とおなじ空だとはとても思えないわ。」

それから、前の暗がりを見渡して、もうみんな寝ちゃったのね、と独言のように呟いた。

「寝ちゃったって、誰の話だい。」

「むこうのペンションのお客たち。あのあたりだったと思うけど」と佳子は暗がりの左手を指さして、「また一軒、新しく建ったでしょう、ヘブローニユ」とかいふ名前の家が。」

「ああ、お隣ね。五月の連休から開業してるよ。」

お隣といっても、間に平坦^{へいたん}な牧草地をはさんで六、七十メートルは離れている。お隣の背後はカラマツ林で、幹線道路からの脇道^{わきみち}がその林のなかをうねうねと通っている。

「くるとき前を通って、びっくりしたわ。ずいぶん洒落^{しゃれ}た造りだから。」

「可愛らしいだろう、洋菓子みたいで。あんなのが女の子に好かれるんだな。」

「そうかしら。あたしはあんなの趣味じゃないけど。……でも、開業早々にしては変に流行ってるじゃないですか。」

「そうかい。」

「あら、気がつきませんでした？」と佳子はいって藤椅子の尚作を振り返った。「暢気ですねえ、宿主としては。」

佳子は、素直で、明るくて、てきぱきと働くい娘だが、尚作に向って「オーナー」を連発する癖だけが難点である。なるほど尚作はペンション「モーツァルト荘」の宿主には違いないが、いくらその呼び名に馴れたとはいっても、面と向って連発されると、いまだに尻がこそばゆくなってくる。「オーナー」といえば聞こえはいいが、内実は同時に番頭であり、コックであり、ウェイターであり、客を送迎する車の運転手であり、力仕事をする従業員でもある。要するに、洋風民宿のおやじにすぎないのだ。

「暢気かねえ。」と尚作は思わず苦笑いした。「だけど、まわりを気にしていたら切りがないだろう。よそはよそ、うちのうち、そういう気持でやるより仕方がないんだよ。それに、こっちにだってお客がないわけじゃないんだから。」

「でも、むこうは満室ですよ。」と佳子はいった。「見ませんでした？ さっきまで、どの窓も煌々と明るんでたんですから。」